おおさか KEY わーど 第6回

市場のにぎわいが〝市振る〟のみなもと

絵葉書「東洋一の中央卸売市場」(1931年)
／大阪市立中央図書館 蔵

大阪名所より「ざこば魚市より府庁望(1900年)」／大阪市立中央図書館 蔵

今回は表紙の幕末の錦絵と本頁の明治の石版画に描かれた“ざこば”、
そして大大阪の時代の中央卸売市場の絵葉書を集めてみた。
この活気が大阪人の“いちびり”精神のみなもとだったんですね。

懐かしくも、いまも大阪で生きる言葉の〈いちびる〉―。「いちびってんと、さっさとしなはれ」と子どものときに叱られた大阪生まれの方は多いと思う。田辺聖子『大阪弁ちゃらんぽらん』をはじめ、それについて書くことが“大阪人”である証しであるかのように、大阪の作家たちもこの言葉にこだわり、何かしら書いている。

牧村史陽(まきむらしよう)の『大阪ことば事典』(昭和54年)によると、〈いちびる〉は〈市振る(いちぶ)〉が転訛(てんか)して「その市振りの嬌態(きょうたい)から来たもの」であり、「調子に乗ってはしゃぐ。ふざける・ほたえる・つけあがるというほどの意」を含むという。〈市振る〉とはどんな状態か、史陽は、幕末の『守貞謾稿(もりさだまんこう)』にある大坂の魚市場“ざこば”の部分を事例に紹介する。

「大坂も雑喉場(ざこば)問屋へ漁村より贈る。問屋にては、一夫台上(いっぷだいじょう)に立ち、魚籃(ぎょらん)一つ宛を捧げ、さあなんぼなんぼと云ふ。(中略)此時、大坂市中魚賈群集し、欲する所の価を云ひ、其中貴価なる者に売与す。これを市を振ると云ふ」(『守貞謾稿』。岩波文庫に『近世風俗志』のタイトルで収録)

魚市場で競りをすることを「市を振る」と呼び、せり市のようにやかましく騒ぐから、〈いちびる〉の語が起こったというのである。いちびる人を〈いちびり〉と呼び、騒がしいこと、子どもが騒いでいる状態などを〈市立てる〉とも言った。商都・大阪らしい言葉である。

そこで今回の表紙は、幕末の大坂の錦絵「滑稽浪華百景」より「ざこば魚市」をあげた。大阪の名所絵では「浪花百景」が有名だが、こちらはタイトル通り、名所を滑稽な戯画調に仕立て、せり市の中でタコが吸いつくやら、墨を吹くやら、売人が指で値をつけようとはするが、市振るざこば全体が大騒ぎで、てんやわんや。いちびって笑わせる。

他に大阪には、〈市振り(いちぶ)〉という言葉もある。せりで手を振って値の決定をとりしきることから転じて、物事のリーダーシップをとることや、その人を指す。その分野の〈旗ふり〉というのと同じだ。毎年、7月28日の「なにわの日」に、「なにわ大賞」(なにわ名物開発研究会主催)の贈呈式がおこなわれる。今年は13回目だった。この賞は、大阪で〈いちびり精神〉を発揮し、活躍した個人や団体が対象だが、おちょけた〈いちびり〉だけではなく、〈市振った人〉、つまり大阪文化の旗を振り、リーダーシップを発揮した人に贈呈するのが選考基準である。審査側もまじめに〈いちびり精神〉を貫き、「欲しくなくても、貰ってぇーな」の意味で贈呈式を「もーてー式」と呼ぶ。

もうひとつ「イチビル」といえば、大阪の表玄関である梅田にある大阪駅前第一ビルの略称だが、隣の「ニビル」(同駅前第二ビル)に本誌編集の大阪市立総合生涯学習センターがある。なにかと厳しい時代に“ニヒル”にならず、本誌も生涯学習の旗ふりとして、一層きばって“いちびる”ことにいたしましょう。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科(兼任)。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』(創元社)など。